

逸脱の連鎖

— 岡本かの子「老妓抄」論 —

横 山 千 華 子

岡本かの子「老妓抄」^①は一九三八年一月の『中央公論』創作欄・「女流短篇特輯」の巻頭を飾った。発表直後から絶賛評を多数集め、かの子の小説家としての名声を確固たるものにした作品である。梗概を左に記しておこう。

「永年の辛苦」の結果、「二通りの財産」と勤めの自由を手に入れた平出園子こと「小その」（以下「老妓」とする）は現在芸者屋を営んでいるが、一〇年程前から「何となく健康で常識的な生活を望むやうにな」っていた。「この物語を書き記す作者」とは新たな稽古事の和歌を学びに行ったことから関わりが生まれる。和歌を指南し、老妓を「母ほども年上」と表現できる若さをもつことしか明らかにされない「作者」は、母屋に「文明の利器」である電化装置を

設備した老妓の感動を描き、そこに芸妓としての彼女の追憶を重ね合わせる。電化装置は「快活で事もなげな青年」・袖木と出会う契機ともなった。彼は現在の自身の仕事に充足を感じておらず、その不満に共鳴した老妓の申し出で世話を受けることとなる。しかし、老妓やその養女・みち子と暮らすうちに当初の意欲を失い、連れ戻されることを期待しつつ出奔する癖をつけてしまう。末尾で、老妓が「作者」に届けた「和歌の添削の詠草」が紹介される。

同時代の言説空間では、本作を「愛情の世界を描いたもの」と定義し「戦争の如何にまるでかかはつてゐない」と述べた風巻景次郎^②をはじめ、本作を含む「岡本さんの文学の美しさ」を「現実から離れたところの想念によつて人間の生活が描かれてゆく」点に見出した窪川（佐多）稲子^③、作品の世界を「遊びごころの突き詰めた一つの心象世界」「宗教にやがて通ずる一つの現実脱走」と断じた十返

④ 一などによって、時局との関わりの希薄さや「現実」を離れた有閑性がしばしば強調されていた。つまり、日華事変の影響を多分に受けた文壇^⑤にありながら戦時色を打ち出しておらず、当時の読者にとって、切迫した現実社会の様相を多分に意識できるものではなかったといえよう。時局の変化に伴い「文学界では数えるほどの作品しか生存できない不利な、不毛な土壌」^⑥、「文学の課題として」記録「報告」ルポルターージュ」という方法が意識された^⑦のが、一九三八年末の文壇であった。

こうした論調は戦後の評論や研究にも受け継がれる。例えば、岩崎具夫が「時代と無縁にみえる」、「有閑的な「性と芸」の世界に取材した作品」^⑧と評した他にも、「昭和十年代のあわただしく、世知がらみ世の中はまったく想像すらできない」、「かの子はひとり、白痴的とも思える強固さで、世俗の現象をいっさい無視し、自己の世界に没入した」^⑨、「当時の時局下ということからは凡そ無関係な感じのするもの」^⑩とされた。だが、これらの評価における「時代」や「世の中」と「老妓抄」とは、果たしてそれほどまでに乖離しているといえるのだろうか。乖離ではなく互いに近接すると考え、時代性という概念を導入して新たに読み解けるのではなからうか。

本稿の試みは、作品世界と時局との関わりを検討し、老女と青年の関係を同時代的文脈のもとに置き直すことである。本作は老いと

性、小説(散文)における短歌(韻文)の位置づけ、語りのあり方など、多角的な視点から読解が行われてきた。その中に「初出時の現実空間と作品空間とは一体となる」^⑪点への言及もあるが、当時の文脈の中で二者の関係を論じたものは管見の限り見当たらない。また、本文に「社会」や「世の中」、「現実」などの世界を表す語が繰り返し使われる点も看過されてきたが、ここでは老妓と柚木がそれらと関わっていくさまを追い、社会に対峙する彼らの姿を捉えてみたい。そして、主に老妓の語られ方に注目しながら「この物語を書き記す作者」の性格を概観し、なぜそのような方法が採択されたのか探る。

最後に、一九三七年夏、総力戦が勃発して以降のかの子の創作活動全体についても一望しておきたい。今までは、短歌や随筆において戦意高揚を訴え時局への迎合をみせる一方、「老妓抄」を含む小説では社会的要請から逃避し虚構の世界に遊んだ、という見解が支配的だった。しかし、かの子の小説にも同時代社会の様相を描いたものが存在することをあわせて指摘したい。

二

本節では職業を有する老妓と柚木に焦点を当て、彼らが当時の世相に対してどのような立ち位置にいたのかを分析する。それぞれの

職は彼らの苦悩の一端を担っており、時局との関わりを検討する上でも重要だと思われるからだ。

本作が舞台とする世界——花柳界は、老妓の人生観や異性との関わり方に大きな影響を与えている。先行論の多くが専ら老妓の人物像を探ることに重点を置いてきたが、ここでは同時代の女性に求められた性規範を視座に、異性との関わり様の様相を確認して考察を加えたい。

左の発言から、不特定多数の客を相手にする仕事を「老妓」と呼ばれるまで続けてきた彼女の価値観がうかがえる。

「何人男を代へても、つまるところ、たつた一人の男を求めてゐるに過ぎないのだね。いまかうやつて思ひ出して見て、この男、あの男と部分々に牽かれるもの、残つてゐるところは、その求めてゐる男の一部々々の切れはしなのだよ。だから、どれもこれも一人では永くは続かなかつたのさ」

「…」彼女は日常生活の場合の憂鬱な美しさを生地で出して云つた。

老妓が羨んでみせたのが「親がきめて呉れる、生涯ひとりの男を持つて、何も迷はずに子供を儲けて、その子供の世話になつて死んで行く」「堅気さんの女」である。家庭の内部にいる女性はまさにこのような生き方をしており、「堅気」の女性のライフコースとし

て子の世話を受けながら生を終えることを想定するのが当時の法的にも正しい認識だった^⑩。ただ、老妓の欲する「男」と「堅気さんの女」のもつ「男」を同列に置くことはできない。彼女の男性遍歴は芸妓という仕事の上にしか成り立たず、「求めてゐる男」も接してきた客たちの面影なしに語り得ない存在である。芸妓として多くの異性に触れてきた老妓は、こうした食い違いに気づかないまま自身の生きる花柳界と素人の女性が生きる世界とを混同する。また、彼女の昔語りからは、困り者時代に情人と逃げ出した経験をもつことや「嫉妬家」の「旦那」の他に心中の相談まで行う相手のあつたことも明かされる。しかも「あたしは死んで仕舞つたら、この男にはよからうが、あとに残る旦那が可哀想だといふ気がして来てね。どんな身の毛のよだつやうな男にしろ、嫉妬をあれほど妬かれるとあとに心が残るものさ」と双方の男性に惹かれていた。職業柄多数の男性に触れ、時には溺れてきたがために「一人の男」を求め続けるのは、芸妓であるが故の苦悩だといえよう。

花柳界に生きる女性を描いた同時期の文学作品に、「雪国」(川端康成、一九三五・一)―一九三七・五)や「濠東綺譚」(永井荷風、一九三七・四)、「夫婦善哉」(織田作之助、一九四〇・四)などがあり、芸妓・娼妓とその客、あるいは情夫である特定の男性との交流が描かれている。これらの作品の共通項としては女性が男性へ抱

く好意について明確な描写がある点、彼らの仲が世を忍んで育まれるという点が挙げられ、彼女たちにとつての「たつた一人の男」との交渉が取り上げられたといつてよい。一方、「老妓抄」でそのような交流は扱われない。老妓の「旦那」や情人の存在は彼女の昔語りの中に仄めかされるだけで、そこに主眼が置かれたわけではなかった。老妓の肌の「滑かさ」と「神秘的な白い色」に瞠目した柚木も、「普通の生活」つまり結婚の対象には「未成熟の娘」・みち子を想起している。また「近頃この界限に噲が立ちかけて来た、老妓の若い燕といふそんな気配はもちろん、老妓は自分に対して現はさない」と、少なくともこの時点で芸妓と客の交わりらしきものは無かった。水田宗子は「花柳界に生きる女を扱った小説は数多く書かれてきたが、その多くは、男のエロスをあやつる女人としての女を描くもので、年をとった芸者の視点から、その内面を描いた小説は少ない¹⁵⁾」ために「異色の作品」と評したが、特定の情人との交情が描かれないことで、老妓が長らくそうした存在を見つけ得なかつた現状が際立っている。同時に、書き手の性差に基づく芸妓へのまなざしの非対称性も見出せるだろう。川端や荷風が芸妓を買客の立場でしか彼女らを眺め得ないのに対し、本作は老妓の発言を記録することで、過去の男達を芸妓の視点から相対化してみせるのだ。彼女のように、特定の男性と婚姻を結ぼうとせずにも成さなかつ

た女性性は、日中戦争下の母性政策による囲い込みから逸脱した存在といえる。このことを、かの子の晩年・一九三七年以降に発表された反響を得ていた作品群が「母性の文学」と称される動きと関連づけてみたい。「老妓抄」も勿論例外でなく、本作の中に「母」を見出す言説は「慈しみの広い大母性と富澹豊麗ないちを瀟洒に披瀝した¹⁶⁾」と評する岡本一平の他、雑誌「文学界」の同人などかの子と親交のあつた男性知識人によって多く紡がれた。当時のこのような風潮は「救済としての純粹母性を求める男たち」¹⁷⁾、「母性の文学隆盛の背景をなした戦時下母性政策」の影響が大きいと考えられる。日中間で総力戦が始まった一九三七年夏以降、多くの進歩的な女性が戦時体制に巻き込まれていくが、作品発表と同年の四月に発令された国家総動員法でも「女性に対しては、人口増加計画が次々と計画され、早婚多産の奨励、傷痍軍人の妻になること、満州開拓移民の青年の妻になること等が奨励された¹⁸⁾」という。先述した「雪国」の島村は肉体的に馴染む前の駒子に「母のようなものさえ感じ¹⁹⁾」、「瀬東綺譚」のお雪も大江との交情が深まると「家庭の人²⁰⁾」への志向を見せ始めて彼を戸惑わせる。老妓の内に母性を発見する傾向も近年まで健在だ²¹⁾。

しかし、彼女は定まった夫やそれに準ずる異性をもたないどころか、能動的に若い男性の世話をしてその生活力を喪失させていく。

また、従来の評価における「母性」とは柚木に対するときのみ効力をもつものとみなされてきたが、老妓の養女はみち子であり、その視線を通して彼女は「おつかさん」「老母」となる。もつとも、この母娘の交流においても国家の期待する「母」の側面が発揮されたわけではなかった²²。養女との間柄を形式のみの母子関係と捉え、女性の内にも母としての役割を執拗に求めた男性主体の言説から脱却したとき、彼女の「母性」は失われる。

では、同時代の花柳界の様相はどのようなものだったのか。もはや花柳界も総力戦と無関係でいられる世相ではなく、芸妓の中にも時局に合わせたふるまいをする者がみられる。一九三八年二月の『中央公論』に掲載された伊集院斉「ダンスと醇風美俗」で「芸者を揚げて遊ぶ事が、国民精神総動員の今日、殊に怪しからぬのは云ふ迄もない」、また高田保「事変下東西盛場風景 東京の巻」(『中央公論』一九三八・一〇)では「大事なお客を叱りつけてまで戦線を保つ銃後を護ろうとするの心意気」と、客を戒めて銃後を守る芸妓が称揚された。狩野弘子「社会時評」(『婦人文藝』一九三七・七)にも、家庭をもつ婦人の活躍の場だった国防婦人会に新橋の芸妓が加入したことが報告されている。若い芸妓を連れて柚木の「退屈の慰労会」を催す老妓は、同じ東京の芸妓でありながらこれらの記事に描かれた風潮とも程遠い。

反対に、柚木の価値観及び行動は同時代の要請に沿うものだった。彼は苦学をして電気学校を卒業したのち、発明を成功させて金儲けをするため「勤人」になることを避けていた。勤め人は文字通り「体を縛られる」職業であり、柚木が望んだ「発明をして、専売特許を取つて、金を儲ける」という目的から遠い生活を強いられる。一九三八年八月の『中央公論』にある「大学生時局生活座談会」では、日本の青年への要求として「重役の言うことを聴くような」「サラリーマン的人間」は現今の社会に不要だという記述がみられた。続いて「日本の飛躍の線に沿ふ能力を学生自体が具えて欲しい」とも渴望されており、自らの意志で「勤人」の道を選ばなかった柚木は同時代における望ましい若者像を体現している。

一方、社会的に賞賛された存在の一つが発明家である。「我国現今の特許制度」について説明した『特許と商標の取り方』(大条正雄、業時報社、一九三六・六)は「発明が一国の文運を助長し国力の開発に与る事は云ふまでもない事で、今日世界の文明国と呼ばれる国々が発明工業の権益保護の為に特許法を布いているのも皆なこのためである」とし、特許を取るにはどのような商品が望ましいかを細かく説いている。また、外村彰「老妓抄」——発明と家出の意味するもの——²³も、発明ないし発明家が当時「社会的に広く認知され、「国家の福利増進」のため期待されていた」事実を指

摘している。その社会的背景として、帝国発明協会が一九三二年に創刊した雑誌『発明』が広汎な読者を得ていたこと、同協会の後援のもとに発明が奨励されていたこと等があった。もともと柚木の目的は、国家の利益への貢献と言いい切れない私的なものかもしれないが、「世の中にないものを創り出し」自力で金銭を得て世を渡ろうとした気概は「勤人」の対極にあるものだ。そして「男があんまり細かいことに気のつくのは、偉くなれない性分ぢやないのかい」と「悲しい顔付き」をする老妓は、柚木の発明の成功を期待し、彼を国家的規範に合致した存在へと誘導していく。時局に対する彼女の対応とその顛末について、次節でも詳細に分析することとしたい。

三

次に、作中における老妓と柚木の外界へのまなざしを追っていく。本文には「社会」や「現実」といった外的世界を表す語がたびたび登場するが、これらの表現は、第一節で引用した先行研究の「世知がらい世の中」「世俗の現象」との同一性を示すものではないだろうか。

左の場面は「ふらくと旅に」出た柚木が「現実」について葛藤する箇所である。

彼女が彼女に出来なくて自分にさせようとしてゐることなどは、

彼女とて自分とて、またいかに運の籤のよきものを抽いた人間とて、現実では出来ない相談のものなのではあるまいか。現実といふものは、切れ端は与へるが、全部はいつも眼の前にちらつかせて次々と人間を釣つて行くものではなからうか。

柚木にとつての「現実」は、自身の希望を打ち砕き人間の欲するもの全てを与えない残酷なものとして「諦め」と共に語られる。

「現実」の厳しさに即して物事を考える彼は、老妓の思惑を「無謀」「果しも知らぬエスカレーター」と一蹴し、「つんもりした手製の羽根蒲団のやうな生活」や「気儘の出来る自分の家へ帰つて、のびく」と自分の好みの床に寝ることを望むのだった。

外界を表すもう一つの表現に、左のような描写の中の「社会」がある。

それから先、彼は何となくぼんやりして来た。「……」かういふ発明器が果して社会に需要されるものやらどうかも疑はれて来た。実際専門家から見ればい、ものなのだが、一向社会に行はれない結構な発明があるかと思へば、ちよつとした思付きのもので、非常に当ることもある。

彼が世間の需要について考えをめぐらせ始めるのは、実用的な電気器具を発明するに際して社会の要求に応える必要があったからだろう。前掲・外村論文は、雑誌『発明』に読者の投稿欄「発明相

談」が設けられたことを紹介している。例えば一九三六年二月号に、ある女性からの投書で「主人は発明狂 断念させる工夫はないか」という題のものがみられる。数年間家業を放擲し納屋にこもりきる夫の研究を断念させたいと相談が寄せられたのに対し、「若し其志して居る所のものが、真に現代の希求するもの」で「其実現に可能性がある」ならば「大いに協力して、其完成の喜びを共にすべき」との回答が載った。同論は「発明を志し生活を犠牲にする人々を擁護するような言説すら見出せた」と続くが、発明は社会から推奨されていた行いとはいえ、「現代の希求」が無ければ意義を失ってしまふものだった。柚木は社会という外界の動きを意識した結果、「世の中にいる気がなくなつた」、「いつも不安」との状態に陥る。「放胆な飼ひ方」を続けられることに違和感を抱く姿は「人のよい大きい家畜」や「ある種の動物」に擬され、柚木自身も発明を「大それたこと」と捉えるようになる。このように、国策に叶うどころか社会に適応することもおぼつかない青年へと変容していくさまが読み取れよう。

また、自ら望んだ生活でありながら実際にその渦中へ身を投じたときの戸惑いも「社会」の語を用いて次のように描かれた。

とき／＼あまり静で、その上全く誰にも相談せず、自分一人だけの考を突き進めてゐる状態は、「…」社会から自分一人が取

り残されたのではないかといふ脅えさへ屢々起つた。

柚木が恐れたのは、己だけ外界の動きから取り残され、多くの人間との交流が途絶えてしまうことだった。彼にとつて「社会」が如何に大きな意義をもつものだったか、右のような記述からうかがえる。では、老妓はこれらに対してどのような態度をとっていたか。先述した通り、彼女は時局が称揚する女性像から逸脱する存在だが、本文には世の中の動きを意識した上での発言がある。

若い芸妓たちは「姐さんの時代ののんきな話を聴いてみると、私たちけふ日の働き方が熟々がつ／＼におもへて、いやんなつちやふ」と云つた。

すると老妓は「いや、さうでないねえ」と手を振つた。「この頃はこの頃でいゝところがあるよ。それにこの頃は何でも話が手取り早くて、まるで電気のやうでさ。そしていろ／＼の手があつて面白いぢやないか」

「若い芸妓たち」が吐露した「けふ日の働き方」への不満とは、時代相を多分に含んだものだと思えらる。老妓を六五歳前後と推定する近藤華子の説に則ると、彼女が雛妓として座敷に出たのが遅くとも明治中頃である。芸妓は「明治時代の寵児」といわれ、嘗ては上流家庭の妻妾となる者があり社会的地位も高いとされていた。しかし、時代が下るとカフェーの女給やダンサーが急激に増加し、

戦局の動きも相まって花柳界は激動の波に吞まれていく。彼女らの不満は当時の世相がもたらす複雑な状況を背景にしたものと考えられるのだが、老妓には自身の若かりし頃と「けふ日」「この頃」とを比較し、現代に独特の長所を見つけて順応しようとする姿勢がある。己の仕事を通して自分なりに社会の状況を見極め、楽観的な生を掴もうとする姿勢である。

柚木が出奔した直接の原因は、彼なりに把握した「彼女に出来なかつたことを自分にさせようとしてゐる」という「老妓の意志」といえるが、その意志がうかがえる箇所にも同様の価値観が示される。彼女の望みを聞いた柚木が「そんな純粹なことは今どき出来もしなけりや、在るものでもない」と嘆くのに対し、老妓は「いつの時代だつて、心懸けなきや減多にないさ」と、その嘆きを「今どき」の世に特有の現象とは捉えていない。やはり現代のみを悲観するまなざしが捨象されているのだ。

時局を反映しないと評されてきた本作だが、時代相に即して読むと新たな面がみえてくる。つまり、国策に叶う志をもっていた前途ある青年が、時局が要請する女性像に沿わない老女の保護を受け、経済的に依存する生活を送ったことで、彼もまた国家が求める存在から逸脱していく有様、そのような逸脱の連鎖とも呼べる様相を見出すことができよう。また、自身の志が頓挫しかけた際に「社会」

を意識して疎外感に襲われた柚木は、それらに惑わされない強靱さを有する老妓に「不敏なもの」を感じて辟易する。本作が描くのは「社会」「現実」をめぐる彼らの認識の違いである。

日中戦争は近代日本が経験した中でも前代未聞の総力戦で、国民に対する数々の政策が打ち出された。成人男性へ国家振興のための働きを要請し、女性に銃後の守りと母性の發揮を強く求めた時代である。第一節で確認したように、この動向を反映した文壇でも「国策文学」「戦争文学」と呼ばれる作品群が台頭していた。そうした中、「老妓抄」は、時代が求める規範に易々と囲い込まれることのない男女がどのように社会と向き合うかを描き出す。殊に老妓は「世の中」の動きに適応し得る人物とされながらも、時局の要望まで達成できてはいない。矛盾を抱え、有望だった青年の生気を削ぎ、それでも「離れるとなると寂しくなる」と慕われた彼女の形象は、閉塞的な総力戦下における生の限界を告発し、そうした社会をもたらししたものに対するアイロニーとなっている。

四

ここで、語り手の独壇場である地の文を分析し「この物語を書き記す作者」の特色を確認しておこう。自由間接話法と定義されることとの多い本作の語りの構造については既に複数の論考があり、語り

手の声と作中人物の声が混在・融合するという指摘が多々みられる。しかしさらに留意すべきなのが、「作者」が彼女の姿を捉え、伝えようとする過程で、少なからず主観を取り入れながら語っている点だ。

まず、真昼の様子と対照的な「職業の場所」での老妓のふるまいに目を向けたい。

彼女は相手の若い妓たちを笑ひでへとく疲れせずには措かないまで、話の筋は同じでも、趣向は変へて、その迫り方は彼女に物の怪がつき、われ知らずに魅惑の爪を相手の女に突き立てて行くやうに見える。若さを嫉妬して、老いが狡猾な方法で巧みに責め苛んでゐるようさへ見える。

右の箇所からは、老妓を「物の怪」のような「狡猾」な存在として示そうとする語り手の底意が汲み取れる。このとき紹介された「支那の名優の梅蘭芳」をめぐる一風変わった「逸話」にしても、聴衆者である「若い女たち」の反応を記すだけで、話の真偽自体を問題にすることはなかった。これは、冒頭部分で老妓の人物像を把握させるにあたって、聴衆者ひいては読者の興味を惹くとともに、老妓を実体の不明瞭な物珍しい存在として提示するための作為だと受け取れないだろうか。

また、末尾の場面で紹介された和歌も、本人の手に成ったものと

は僅かに異なっている。

「…」老妓からこの物語の作者に珍らしく、和歌の添削の詠草が届いた。「…」その中に最近の老妓の心境が窺へる一首があるので紹介する。もつとも原作に多少の改削を加へたのは、師弟の作法といふより、読む人への意味の疎通をより良くするために外ならない。それは僅に修辞上の箇所にとゞまつて、内容は原作を傷けないことを保証する。

本作は、右の描写に続く「年々にわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり」の一首で閉じられた。「読む人」はここで老妓が「悲しみ」と「華や」ぎという相反する「心境」の中にいると知らされる。しかし、「読む人」のために加えた「多少の改削」も、やはり語り手の主観的な判断のもとになされたことを見逃してはならない。「原作」をどのように「改削」したのか、結果として本當に「意味の疎通」が「より良く」なったのか、彼らに確かめる術はないのである。

「作者」について注目したいのは以下の二点である。まず、老妓の様相をありのままに伝達するよりも「読む人」の思惑を重視していたところだ。だが「読む人」に寄り添う姿勢を示しつつ、彼らに与える情報をコントロールしており、老妓の全貌を眺めることは許していない。柚木の心の動きを丁寧に描写していることに比しても、

老妓の造形に際して恣意的な作為が施されたと考えてよい。「作者」が客観的な立場を放棄して柚木の内面に介入する箇所では、とりわけ老妓に向けた感情が多く描かれるが、彼の視線を通すことでさらに不可解な人物へと仕立て上げるためであろう。また、「作者」は語り手として機能するだけでなく「この物語を書き記す」と自ら述べていた点を思い起こしたい。「書き記」して残す価値があるものと捉えたからこそ書き手の役割を引き受け、後世の者に読まれることをも想定して執筆したといえよう。

以上のような老妓の語られ方は、前節において明らかにした本作の批評性などのように関連づけられるか。老妓は世間の動きに目を向けながら現代の世を悲嘆することなく生き抜こうとしたが、図らずも若い青年の生活力を奪い、時局からの逸脱者に変容させていった。作品の序盤から見え隠れする「作者」はそのような老妓の心情まで詳細に説明しないため、総力戦下において望ましくない女性像を提示してみせたという事実だけが残る。「作者」が「書き記」したことで物語は読み継がれ、現代の読者である私たちも、老妓の存在をいかに受け止めるか問われ続けているのだ。

五

最後に、かの子の諸作品と総力戦との関連について所見を述べて

おきたい。

「わが将士を想ふ言葉」(『輝く』一九三七・一〇)や「銃後の詠」(『短歌研究』一九三七・一一)、「女性は事変で何を得たか?——民族的本能の目覚め」(『新女苑』一九三八・二)などで戦意高揚をうたい銃後の女性への呼びかけを行ったかの子は、現在、戦争協力に加担したとして批判の対象となっている。ただ、俎上に載せられるのは彼女の創作の一部、つまり随筆や短歌に集中していた。高良留美子は「小説以外のところでは、彼女は数十篇におよぶ戦争や民族についての文章や短歌を書きつづけ」たとしつつ、事変以降の小説群をことごとく「時局はずれ」と断じる。また、雑誌社の要望に応じて戦争協力的な文章・短歌を発表した理由を「自分の小説を時局的でないという非難から守る」ためだったと推測している³¹。松本和也も「短歌や随筆においては時局(戦局)の要請に、むしろ先駆的に対応していた」、「表現ジャンルを使いわけて」³²小説以外の局面では時局に積極的に切り結んでいた³³と結論づける。時代遊離の傾向が強いとみなされてきたのは「老妓抄」のみでなかったのだ。

しかし、本当に「時局はずれ」の小説ばかりだったといっているのだろうか。また、「老妓抄」だけでなく「明暗」(『むらさき』一九三七・一)や「母子叙情」(『文学界』一九三七・三)のように、自作の短歌を挿入した作品も散見されるかの子文学において、こ

した観点から小説とそれ以外のジャンルを切り離してしまう見解には慎重であらねばならない。

比較的分かりやすい例として、試みに「勝ずば」（『新女苑』一九三七・一二）と「快走」（『令女界』一九三八・一二）という二つの小説を取り上げてみよう。「勝ずば」には高良も言及しているが、「最後の軍歌の場面は唐突で、前半の起伏を受けとめていない」「失敗」^④作だと否定的だった。ただ、重要なのは「千人針を二針三針縫った」、「ラジオ戦勝ニュースを聴くのを楽しみにした」といった描写や、軍歌「日本陸軍」^⑤の「一節・「歓呼の声に送られて」「…」を歌う人々の姿が認められる点だ。その歌声と、出征兵士を見送る「万歳！ 万歳！」の叫び声が、病床にある政枝の「みんな勇ましく行く、そしてそれは勝つためにだ。自分も——」という「知覚」の動きを促す。だが彼女の生は終わりを迎え、戦争へと駆り立てられる周囲の熱気とは対照的な、減びゆく命に焦点が当てられる。「快走」でも、「国策の線に沿って」「和服で済ま」そうと心がける少女の日常が描かれている。このような世相に鑑みたとき、同作は「女学校在学中ランニングの選手だった」彼女が、「あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来たという感じ」や「毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮らしている」不満を、走ることによって解消しようとした作品だと捉えられよう。

かの子の小説は「社会や時代や実生活に直接的に明白な形でコミットしている」と言い難い^⑥。テキストだとされてきた。しかし、右に挙げたような作品からも、戦意高揚を単純にうたうのとは異なった批判的なまなざしを掬い取ることができる。彼女の小説研究における今後の課題として、当時の社会状況が描かれたテキストそのものの発掘と、それらの同時代的意義及び批評性の検証が挙げられよう。今回はかの子の代表作である「老妓抄」を取り上げ、老女が青年を逸脱へと引き込む過程が同時代社会への批評を果たした可能性を指摘した。こうした作業の積み重ねにより、時局との距離や強固な異性愛規範、女の性の捉え方など、現在まで自明とされてきた数々の前提も問い直され、その文学の新たな面を照らし出すことができるだろう。

注

- ① 本稿における「老妓抄」の引用は『中央公論』（一九三八・一一）、かの子の諸作品の引用は『岡本かの子全集』（全一二巻、一九九三・六）一九九四・七、筑摩書房による。引用に際し、旧字は適宜新字に改め、振り仮名は全て省略した。引用文中の「…」は省略を、／は改行を表す。
- ② 風巻景次郎「文学界のことども」（『国文学 解釈と鑑賞』一九三八・一一）
- ③ 窪川稲子「複雑の美について 文藝時評（一）」（『読売新聞』夕刊、一九三九・三・二九）

- ④ 十返一「岡本かの子論」(『三田文学』一九四〇・一二)
- ⑤ 「老妓抄」が発表された一九三八年は、「戦争文学への地ならし」として「文藝雑誌の中にまで戦時編集が認められ、文学と戦争に関する多くの項目がとりあげられた」(板垣直子「一九三八年の文学——文藝時評——」『文藝』一九三八・一二)年であった。同年八月、「改造」に連載された火野葦平の「麦と兵隊」が世の中を席巻した事実はよく知られている。また、戦意高揚を狙う内閣情報部の計画で菊池寛・佐藤春夫・林芙美子ら二名の従軍ペン部隊が中国大陸へ赴き、「文壇を大動員することは空前のこと」(室伏高信「文士を送る」『読売新聞』夕刊、一九三八・九・六)と評された。室生犀星は、同年末の状況を「今事変の影響がそろそろ小説にあらはれ始めた。『…』菌の浮くやうな時勢に阿つた小手先ばかりの仕事が多く、読む方が恥しくなるばかりである」(陣をしく女流作家 真二つに割れた文壇『読売新聞』夕刊、一九三八・一一・二三)と酷評すると同時に、事変下における「女流作家の進出」に言及した。
- 日中開戦の衝撃はこのように文壇を変容させ、軍や一部の作家による文学の商品化も推し進められようとしていた。
- ⑥ 陳伯陶「岡本かの子と三つの瘤」(『淡江日本論叢』第七卷、一九九八・三)
- ⑦ 五味潤典嗣『プロバガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』(株式会社共和国、二〇一八・五)
- ⑧ 岩崎呉夫『芸術餓鬼 岡本かの子伝』(七曜社、一九六三・一二)
- ⑨ 福田清人 平野睦子『岡本かの子 人と作品27』(清水書院、一九六六・五)
- ⑩ 久威智『岡本かの子研究ノート』(菁柿堂、一九九三・八)
- ⑪ 野田直恵「岡本かの子「老妓抄」論——それぞれのパッション」(『国

- 語国文』第八二卷、二〇一三・一二)はさらに、老妓がミスタンゲットのレコードやライターなど「時流に即した事物」に囲まれていたと指摘する。なお、中央科学研究所編『新修科学百科大系』(大成社、一九三七・三)によると、「電気負盆」も「電熱を応用した、時代に適はしいものの一例」と説明されるものだった。
- ⑫ 倉田容子「『老妓抄』と『晩菊』——尊厳の所在」(『語る老女 語られる老女——日本近現代文学にみる女の老い』所収、學藝書林、二〇一〇・二)によれば、「一八九九年七月に施行された明治民法の親族編第八章には「扶養の義務」の章が設けられ、家族間の扶養権利義務が明文化されるとともに、扶養者・被扶養者の順位等が定められた。扶養権利者の順位は直系尊属(親)が直系卑属(子)よりも優先されており、「…」社会福祉が不十分であった戦前の日本において、「家」制度からの疎外は老後保障の喪失をも同時に意味していた」。
- ⑬ 水田宗子「『パッション』への憧憬——『老妓抄』をめぐる『老いの愉楽——「老人文学」の魅力』東京堂出版、二〇〇八・九」
- ⑭ 注⑬に同じ。
- ⑮ 岡本一平「妻を懐ふ」(『かの子の記』所収、小学館、一九四二・一)
- ⑯ 例えば、川端康成は「岡本かの子序説」(『日本評論』一九三九・七)で「『老妓抄』では、母性と恋人とが一つになつて、一青年の希望と生氣とを吸ひ取つてしまふやうな不思議もある」とした。
- ⑰ 岩淵宏子「戦時下の母性幻想——総力戦体制の要」(『女たちの戦争責任』所収、東京堂出版、二〇〇四・九)
- ⑱ 注⑰に同じ。
- ⑲ 『川端康成全集 第五卷』(新潮社、一九六九・四)
- ⑳ 『永井荷風全集 第一七卷』(岩波書店、一九九四・一六)

⑲ 岩淵(前掲⑰)は老妓を「男のいのちを自らのいのちに流し込んで豊穠な河の性を生きたる、母性的かつ魔性的女」と定義し、水田宗子も「(若い)の風景——岡本かの子『老妓抄』と林美美子『晩菊』」(『物語と反物語の風景——文学と女性の想像力』所収、田畑書店、一九九三・一二)で、老妓が柚木の生活を支援したことは彼女の母性愛による「無償の行為」とし、彼らの間柄を「母子関係」と位置づけている。

⑳ 小林洋介「引用される自作、参照される作家——岡本かの子『老妓抄』における短歌——」(『国語と国文学』第一〇〇巻、二〇三・七)は「老妓が柚木に望んでいたものは、みち子には期待できない何か、少なくとも単なる擬似的な母子関係だけではない何かだったはずだ」と指摘するが、本稿ではさらに同時代における「母」の意味合いを強調しておきたい。

㉑ 同記事には「新橋の芸妓も国防婦人会に入つたと聞く、最近、急に、これら接客商売の婦人の間に国防婦人会や愛国婦人会の組織がひろめられてゆくことは、果して何を意味しているであらう。[...]愛国団体に関心を持てば、当局の御おぼえがめでたく、したがって営業上便宜もあるだらう。一方世間に対しても商売のよい宣伝となる」とあった。

㉒ 外村彰『岡本かの子——短歌と小説——自我と没我と——』(おうふう、二〇一一・三)所収。

㉓ 近藤華子『『老妓抄』——芸者が舞台を降りるとき——』(『岡本かの子——描かれた女たちの実相』所収、翰林書房、二〇一四・九)は「作者」と老妓の年齢差を、かの子とその母・アイに重ね合わせて二四歳程度としている。作品内時間を一九三三年と定める近藤は、当時四四歳だったかの子の年齢から、アイが存命だった場合の年齢を割り出した。

㉔ 田村西男『芸者』(中島辰文館、一九一一・二)には「十五になる深雪といふ、柳橋の雛妓」が登場する。また、加藤篤二『性魔の誘惑』

(一九三一・二)「芸妓と雛妓」の項目に「十九歳の女が芸妓になつた」とあり、雛妓の年齢は二〇歳未満と推定できる。前掲㉔に基づく、本作の老妓が雛妓だった四五年前は一八八八年となる。

㉕ 滝川政次郎『遊女の歴史』(至文堂、一九六五・七)

㉖ 例えば、寺澤ゆう「一九三〇年代のカフェーにみる性風俗産業界——動搖の裏側にある女給の労働実態——」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第一〇三号、二〇一四・二)は、エロチックなサービスを売り物にするカフェーが一九三〇年前後に流行し、既存の性風俗産業であった芸妓を擁する花柳界に大きな影響を与えたと指摘する。だが、戦時下には様々な娯楽や風俗産業が粛清され、興亜奉公日の実施などで風俗産業全体の縮小が図られた。カフェーブームによって急増し店舗が飽和状態にあった同業界は、一九三〇年代半ば頃から徐々に不況に陥つたといつてよい。こうした動きの中、旧来の主流を担う花柳界に立ち戻る客もあつた。

㉗ 宮内淳子「広がる声——『老妓抄』——」(『岡本かの子——無常の海へ——』所収、武蔵野書房、一九九四・一〇)、服部滋「微笑と憂鬱——『老妓抄』を読む」(『国文学——解釈と教材の研究』第五二巻、二〇〇七・二)など。

㉘ 宗晴美「届かない声——『老妓抄』について——」(『文芸論叢』第四六号、一九九六・三)

語り手の声と柚木の心情とが混在する描写には、以下のような箇所が挙げられる。

彼はたいして有難いとは思はなかつた。散々あぶく銭を男たちから絞つて、好き放題なことをした商売女が、年老いて良心への償ひのため、誰でもこんなことはしたいのだらう。こつちから恩恵を施してやるのだという太ましい考は持たないまでも、老妓の好意を負担

には感じられなかった。

これは、自分等の年頃の青年にしては変態になったのではないかしらんとも考へた。／＼それに引かへ、あの老妓は何といふ女だらう。憂鬱な顔をしながら、根に判らない遅ましいものがあつて、稽古ごと一つだつて、次から次へと、未知のものを貪り食つて行かうとしてゐる。

③1 高良留美子『岡本かの子 いのちの回帰』（翰林書房、二〇〇四・一）

③2 松本和也「現役小説家・岡本かの子の軌跡——同時代評価の推移とその背景」（『国語国文』第八五巻、二〇一六・四）

③3 「老妓抄」の中の和歌・「年々に…」の初出は、岡本かの子の名で発表された「抜歯譜」（『短歌研究』一九三八・五）である。

③4 注③1に同じ。

③5 「日本陸軍」（大和田建樹作詞、深沢登代吉作曲）は日露戦争期の軍歌だが、国民の戦意高揚や意識喚起といった役割を担い続け、一五年戦争下においても歌われていた。（戸ノ下達也『国民歌』を唱和した時代昭和の大衆歌謡）吉川弘文館、二〇一〇・八）

③6 近藤華子（前掲②5）